

表彰と敬遠

「週末寸言」原稿 20091024

延喜3年（903）2月25日、菅原道真は両手にかかえきれないほどの怨念を抱いて、配流の地九州大宰府で死去した。享年59歳。

この事件を契機にして朝廷内では予期せざる不幸が次々と襲来するようになった。先ず、道真の政敵左大臣藤原時平が弱冠39歳で薨去する。次いで時平の甥で醍醐帝の皇子保明親王やすあきみや、孫の慶頼王やまよりま

でが相次いで薨去。こうなると思いがたる節の無いわけでもない朝廷にとっては気持ちが悪い。そこで延長元年（923）には、死人の道真を右大臣に復し正二位追贈という姑息な手段に出た。これでも怨念のおさまらない道真はついに雷になって延長8年（930）6月26日、清涼殿に飛び込んでこれを全焼させ、死者多数を出す暴挙に出た。ここに至ってついに朝廷は奥の手を使うことにした。神に祭り上げるのである。天曆元年（947）6月北野の地に祠を建立してここに道真を

祭ってしまった。現在の北野天満宮である。これは、政治的に面白くない対抗者を「祭神」にすることに よって敬して遠ざけ、彼の影響力を行使させなくする実に巧妙な伝統的手法である。さて、天神様と比べようというのではないが筆者にも類々の体験がある。某町の町長が新顔に代わった。新町長は、先代とは宿敵の仲で連戦連敗だったのだが、ちよつとした不始末がもとで先代が辞職に追いやられ、棚ボタ式に出番が回ってきたのである。

新町長、政敵の治世下で実施されていた政策はすべて取り止め。その中に筆者がコミットしていた政策も入っていた。「残念ながらこれは廃止に決まった」と役場から連絡が来たのは新町長就任後間もなくのことだった。しかし、このおかげで筆者は、その年の町制記念日に町政功労者として表彰に与ることになった。もとより公務多忙、よって式典は欠席させてもらった。間もなく賞状が郵送されてきた。が今はもう手許には無い。時は秋。各地で〇〇功労者表彰が盛んに行われている。受賞者のみなさん、これが本当に表彰か、敬遠か、よく調

べて「受賞」しましょう。